ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理　Monthly Bulletin　Vol.25 No.4 April 2024

天理大学 おやさと研究所　Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

4

CONTENTS

・巻頭言
神殿を見学する
／井上　昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」（12）
明治 21 年 6 月～ 12 月
／深谷　耕治 2

・ライシテと天理教のフランス布教（35）
21 世紀のライシテと天理教のフランス布教 ⑤
／藤原　理人 3

・英語文献にみる天理教（3）
The Church at Home and Abroad (1)
／尾上　貴行 4

・音のちから―中国古代の人と音楽（19）
出土楽器が語る音の世界―歌鐘・行鐘―
／中　純子 5

・ヴァチカン便り（67）
子宮の貸与は許されるのか―ローマ法王の最近の談話から
／山口　英雄 6

・図書紹介（136）
室井光広著『エセ物語』
／金子　昭 7

・2023 年度おやさと研究所　特別講座「教学と現代」のお知らせ 8

巻頭言

神殿を見学する

おやさと研究所長　井上昭洋　*Akihiro Inoue*

私は天理大学でいくつかの科目を教えてきた。その 1 つにフィールドワークの方法論がある。この授業では、フィールドワークの重要なテクニックである参与観察について、その初歩だけでも経験してもらうべく、毎学期、学生たちを天理教教会本部の神殿見学に連れていくことにしていた。参与観察とは、ある社会的な空間に主体的に参加しつつ客観的に観察するという方法である。神殿見学の場合、神殿で参拝しつつ、神殿内の様子を観察するということになる。神殿、教祖殿、祖霊殿を参拝して周り、建物の構造や殿内にいる人たちの行動についてつぶさに観察して短いレポートを書くのが、その日の課題だ。

観察することは簡単そうに思えて、案外難しい。見学にあたっては、当たり前に感じられることを意識して書き出すように学生に指示し、レポートを書いた後に、「私たちは何を見ているのか？」、「私たちには何が見えているのか？」について振り返ってもらうことにしている。どんなに当たり前のことでも一から全て書き記すのは骨の折れる仕事である。見慣れた風景では当たり前のことを見落としがちだ。学生の中には、天理高校の卒業生もいれば全くの未信者の者もいる。神殿見学で得た情報を当たり前のことも含めて書き出すという作業は、見るもの全てが新鮮に映る後者の学生のほうが有利である。

未信者の学生であれば「神殿は二階建ての建物で、一階は下駄箱とトイレで、二階が礼拝場になっている」と書いたりするが、信者の学生で神殿が二階建ての建物であると指摘する者はまずいない。賽銭箱の数の多さについて指摘するのも決まって未信者の学生だ。ただし、「たくさんの賽銭箱がある」と記すだけでは不十分で、できれば賽銭箱がどこに幾つあるのか、どのように設置されているのかを記すのが良い。また、信者の学生であれば「神殿の上段には鳴り物が置いてある」、「神殿中央に甘露台が据えられている」などと記すが、未信者の学生だと「板の間に大きな太鼓と小さな太鼓が置いてある」、「中央に木製の六角柱の置物が置かれている」と記したりする。どちらがより詳細に観察記録を取っているかは明らかだろう。翌週の授業では、同じ時に同じものを見ているはずなのに、経験や立場が違えば同じように見えていないということを解説し、どんな当たり前のことでも意識して書き留めることが参与観察の基本であると教える。

人の行動についての記述としては、「廊下で膝当てをして四つん這いになり、歌いながら雑巾がけをしている人がいる（「みかぐらうた」を歌いながら回廊ひのきしんをしている人がいる）」、「靴べらを持った男性が靴べら使いますか？と聞いてくる（境内掛の人が靴べらを使うかどうか尋ねてくる）」、「背中に天理教と書かれた黒いハッピを着ている人がいる（参拝者にはハッピを着ている人とそうでない人がいる）」といったものが定番だろうか。「正座をしてレゲエのような歌を歌いながら手を振っている人がいる」と書いた未信者の学生がいたが、相当にクセの強い歌い方で座りづとめをしている人がいたのかもしれない。

ある時、「廊下では信者さんから何度も挨拶される」と書いた学生がいた。二十数名の学生を引き連れての神殿参拝なので、他の参拝者から見れば、未信者の社会見学としての参拝であることは一目瞭然だ。それと分かって挨拶してくれたのだろう。ただし、挨拶をしてくれたその人が殿内ですれ違う他の参拝者にも同様に挨拶しているのかどうかは分からない。いずれにせよ、神殿の中は、親神の元に帰ってきた一れつ兄弟姉妹が集う陽気ぐらし世界を象徴する空間である。誰とでも挨拶をすればそのことが実感できるはずだ。

明治21年6月～12月

天理大学人間学部講師
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

明治21年4月に東京で「神道直轄天理教会」が公認された。7月23日におぢばに教会本部が移転されるまでの3カ月間は役員が交替で東京の仮本部に詰めていたようで、増野正兵衛は5月24日から東京に出向している。その頃の「おさしづ」を見ていきたい。

- 明治21年6月19日：東京に於て増野正兵衛詰合中身上障り、松村吉太郎も同様に付、両人より願う時の増野正兵衛へのおさしづ／右同時、松村吉太郎居所及胸悪しきに付伺／押して、東京本部に於て参詣人に神一条の道を伝えても宜しきや、又本部にてするは差し支えなきや伺
- 8月16日：増野正兵衛左の足指手首痛み、咽喉悪しく腹痺れ、左の肩咳出で障りに付伺
- 8月29日：増野正兵衛咳、腹の痺れ伺
- 11月20日（陰暦10月17日）：東京より前川菊太郎、増野正兵衛同道にて帰り願
- 12月10日：春野千代出直に付、後治め方願
- 12月12日：春野夫婦大阪へ引越し、母一人残り別に隠居致し、その方へ増野正兵衛一所に引越致しても宜しきや伺
- 12月17日午後11時：増野正兵衛伺、（前伺の、母方へ一所になるおさしづの中に、「後一つたんのうであろう又談示せえ」と御聞かせ下され、又身上障りに付おさしづに「夜明けたらという事も聞いてある」と聞かし下され、これはこちらへ御引寄せ下さる事でありますや、又悟り違いにや伺）／同日、増野正兵衛一度神戸へ帰りまして、内々談示致しとう御座りますに付御暇願
- 12月20日：増野正兵衛東京を止めおぢばへ帰る事の願

東京の仮本部には増野正兵衛の他に松村吉太郎もいたが、両者とも身上の障りとなり、明治21年6月19日に「おさしづ」を仰いだ。「神がいずみ、神一条いずみ、人が頼り多く、人運ぶ人気（にんき）大き心を早く思案立て替え」とあり、おそらく人の多い東京で様々なことを見聞きするうちに、増野・松村両人に神一条の思案が薄くなったのではないだろうか。「神一条これまで聞いたる話を、大きな心と立て替えて、心を治め居よ」と諭されている。

7月23日、教会本部がお屋敷に移転された。それに伴って8月5日に東京の本部は出張所となった。正兵衛は、11月末頃まで東京で勤めていたようである。そうした中、8月16日、正兵衛は「左の足指」「手首」の痛み、「咽喉」の悪い状態、「腹」の痺れ、咳による「左の肩」の障りについて神意を尋ねている。症状に対して一つひとつふれることはなく、「順々の道を来れば変わり来る」と諭されている。

それから2週間ほど経った8月29日、今度は「咳」「腹の痺れ」で伺っている。「皆々先ず〳〵代わりや〳〵」とあり、押して「今一時代わりで御座りますか」と尋ねると、「さあ〳〵一時一つの理はなるまい。順々の道急ぐ。早く〳〵一つの理を治めにゃなるまい。退屈してはならん〳〵」と諭された。すぐの交替ではなく、「退屈してはならん」とあることから、正兵衛の勤め方に対するお諭しと解される。

正兵衛はそれから3ヵ月ほど東京で勤めた。そして、11月20日、前川菊太郎と共にいよいよ帰ってくることになり、「おさしづ」を仰いだ。「一日の日もならんと思うた日もある。神一条の道はもう一段二段三段とは言わん」とあり、東京で勤めた正兵衛たちを労（ねぎら）っておられるように思われる。それから9日後の11月29日には、おぢばにて教会本部の開筵式が執り行われた。

さて、東京から戻った正兵衛に、義姉・春野千代の出直しというふしが起きた。12月10日にその後の治め方について伺っている。「めん〳〵理を定めやるがよかろう。これで理である。それで十分さしづ取り扱い、これで成程、めん〳〵運んでやるがよい」と諭され、この出直しを契機として、おぢば移転について心を定めることを促されていることが読み取れる。

2日後の12月12日、「春野夫婦大阪へ引越し、母一人残り別に隠居致し、その方へ増野正兵衛一所に引越致しても宜しきや」と伺っている。「春野夫婦」とは、春野利三郎（妻いとの兄）と千代のことであろう。千代が出直してしまったので、利三郎が大阪へ引っ越し、その代わりに正兵衛夫婦が母・春野ゆうと神戸で暮らすことについて尋ねたと考えられる。「互いに一つ理、心重々たんのう、いかなる処、一つ談示してくれるよう」と、それぞれが「たんのう」できるように談じ合うことを諭されている。

その後、同じ日に、正兵衛は自身の身上（「居所悪しく」「目の痒み」「寒気」「咳」「腰重く」）について神意を尋ねている。「一度世界十分、神一条一段二段、世界一つ通りては、なれどもどんな者でも、いずれ〳〵一つの理に寄せて了う。こちらが妨害、あちらが邪魔になる処は、皆神が引払うて了うで」と厳しい言葉で、「一つの理に寄せて了う」（ぢばへの移転）ことを諭されている。「又身上の処、内々一つ大抵思う道が、夜明け一つ来るならという事が聞かしてある」とも述べられている。

正兵衛は、この日の二つの「おさしづ」について思案を重ねたことであろう。それから5日後の12月17日、改めて神意を尋ねている。正兵衛は、母の件に関して「後一つたんのうであろう又談示せえ」と言われたことと、自身の身の障りについて「夜明けたらという事も聞いてある」と言われたことに関して、「これはこちらへ御引寄せ下さる事でありますや、又悟り違いにや」と伺っている。「仕切ってどう、内々あちらこちらどうしよう。一つ理を定めて、又こうして後にこう、一つ理も治まる」と、心を定めて通れば治まってくることを伝えられつつも、「どうこうせいとは言わん」と、具体的なことに関しては正兵衛たちに一任されている。その上で「さあこれまで尽したこうのう、落そうにも落されん、捨ようにも捨られん。一つ治むるなら一つ理も治まる」と、正兵衛への労いとも取れるようなお言葉を下さった。そこで、正兵衛から「一度神戸へ帰りまして、内々談示致しとう御座ります」とお暇を願うと、「何事も身に掛かる。神一条心に掛からんのが道と言う」と神一条の道について諭されている。その後、12月20日、東京出張を取りやめて、おぢばに帰る事を伺うと「さあ〳〵古き処の話、聞いた処の道は、たゞ一段二段、さあ〳〵もうこれから先の道は、危なき怖わきは無い程に」と諭されている。「たゞ一段二段」とは、かんろだいの石普請のふしを示唆されていると思われる。

21 世紀のライシテと天理教のフランス布教 ⑤

天理教リヨン布教所長
藤原　理人　*Masato Fujiwara*

今回は Miviludes 委員会が特にページを割いた団体についてみてみたい。逐一紹介する紙幅はないが、興味深い事例が多く報告されている。ただ、以前述べたようにフランスではカルト教団というレッテルは公式には存在しないし、政府機関である委員会の報告が全て正義だと決めつけてはいけないことも改めて明記しておく。

まず 2021 年に 33 件の通報があったサイエントロジーには、その活動に不透明性があるとしている。関連団体の「人権のための市民委員会（Commission des citoyens pour les droits de l'homme）」を使い、精神医学とはまやかしでその疾患は病気ではないとして、フランスの精神医療に対する不信感をあおるような活動を 2021 年以降顕著に展開している。「人権国家諮問委員会（Commission nationale consultative des droits de l'homme）」や「人権連盟（Ligue des droits de l'homme）」のような公益性を認められた機関とまぎらわしい名称を用いることで、患者らに正当性を誤認させる恐れがあり、曖昧なアプローチで布教活動を行っているとしている。

2021 年は 99 件の通報があったエホバの証人については、よく知られる輸血拒否も改めて指摘されており、ある妊婦が輸血を受けずに亡くなった事例を出して、エホバ信者の妊婦の死亡率は通常より 40 倍高いとの 2005 年の国家倫理諮問委員会（Comission Consultatif Nationale d'Ethique）の報告を紹介している。フランス国務院の見解や 2002 年 3 月 4 日の法律によると、重大な健康被害の恐れがある場合は医師が最善と判断した治療を本人や家族の意思に反して行えるが、輸血の拒否も含め基本的に患者の意思は尊重されるとしている。しかし、現実には教義や破門に縛られて自由に治療法を選択できない、輸血に代わる医療を医師に執拗に勧めてくる、あるいは第三者が患者の自由な意思表示を阻止するというケースもあり、適切な処置を受けられない信者もいる。Miviludes 委員会が聞き取りを行った元信者は、輸血を拒否して死亡した子供は殉教者として扱われ、そうなることを夢見ていたと証言している。そして医療面以外では、エホバの証人の長老への聞き取りによる教団独自の司法システムが、公的機関への通報を思いとどまらせてしまう危険性が指摘されている。性暴力で苦しむ女性に不利な教団判決が出た事例もあり、信者間の性暴力を助長しかねない。また熱烈な勧誘活動を推奨する布教面では、未信者の死は改宗させられなかった信者の責任とされ、そうした心理的圧迫を与える手法の危険性も挙げられている。教育においては、学校よりも教団の教えを優先させる傾向があるため内向的、閉鎖的な雰囲気があり、文化面、社会面において子どもの自由な知性の発達を阻害する要因がみられると報告している。

続いて、ルドルフ・シュタイナーのアントロポゾフィー（人智学）が挙げられている。その思想そのものは問題視されないが、危険性のある活動を 2 つ挙げている。第一は医学面で、病気は患者が前世で犯した過ちや罪からくる宿命であって、それと病は切り離せないとし、通常の医学は不完全で限定的なものだと考えている点である。代替医療や排他的医療のように一般的な医療を否定するわけではないが、双極性障害患者にリチウム服用を中止させるなど疑義の残る治療法で患者を危険にさらしたとされる例も報告されている。グレゴワール・ペラ（Grégoire PERRA）は自身もかつてフランスアントロポゾフィー協会（Société anthroposophique de France）のメンバーだった。彼は、アントロポゾフィーの信条に起因する治療法が引き起こした事件を批判的に列挙し名誉棄損で起訴されたが、ストラスブール裁判所は 2021 年、公益のための正当な議論であり名誉棄損に当たらないと判断した。2 つ目の例がシュタイナー教育である。既出のペラ氏もシュタイナー校出身で、のちにその教師も勤めた。彼曰く、同校の教育方法は、革新的、進歩的、開放的に見せて、その実 100 年も変化がなく、理性を通じて自由に自分自身に責任を持たせるような教育を意図的に拒否しているという。寄せられた証言からは、運命論的な論法で障がい児に対するいじめを看過したり、子どもに親の言う事を聞かなくてもいいと教えたりする事例が報告されている。

次に挙げられているのはパリのファミーユ（Famille、「家族」の意）というグループである。選民思想を持つ 8 つの家族が、3000 から 4000 人規模に及ぶ漠然としたファミーユという一大集団を形成しているとみられている。パリのモントルイユ（Montreuil）地区で誕生し、一見普通の生活を送っているようにみえるが、一般的な生活とは一線を画している。医療、司法、商業の職には就かず、会計、建築、服飾、印刷の仕事をし、また社長など人を使う立場に立ってもいけないという。女性はショートヘアやパンツは禁止で、産み育てが主な仕事とみなされ、子どもは成人前から飲酒を強く勧められる。そして、8 つの家族の間での近親婚は今も続いている。これらの伝統は以前より緩くなっているそうだが、近親婚が原因と思われるブルーム症候群や夭逝のリスクは高く、若者の飲酒も含め未成年の健康問題が懸念されている。またパリを離れてイスラエルのキブツをモデルに共同体生活を営むグループが独立して誕生し、1960 年にパルダイアン（Pardailhan）という所に共同体を作り、その後 1969 年にマルルヴェール（Malrevers）に居を移し今も集団生活を送っている。この共同体内での暴力と子どもに対する人権侵害が報告されている。

その他プリマス・ブレザレン、エコビレッジといった集団や、フェミニズム、アンチフェミニズム、コーチング、メディテーションなど多様な分野において健全な生活を脅かす可能性のある運動についても注意が促されている。

こうしてみると、教団の透明性、マインドコントロール、医療行為、教育を含めた子どもの人権といった問題が頻繁に登場する。天理教は上記の組織と比較して、教育や子どもの人権で同一視されそうな類似点は見受けられないが、教団組織の在り方、信仰や布教のアプローチ、病気の治癒に関しては注意が必要になってくる面もあるだろう。教団として、あるいは一信者として、非信者との認識の差で誤解を招く可能性があるとしたらどういう点だろうか。次回以降、天理教がフランスで布教するにあたり、注意しなければならないことを中心に考えていきたい。

［参照］

MIVILUDES 2021 年活動報告（2022 年 11 月 3 日　https://www.miviludes.interieur.gouv.fr/publications-de-la-miviludes/rapports-annuels/rapport-dactivit%C3%A9-2021　2024 年 3 月 2 日閲覧）。

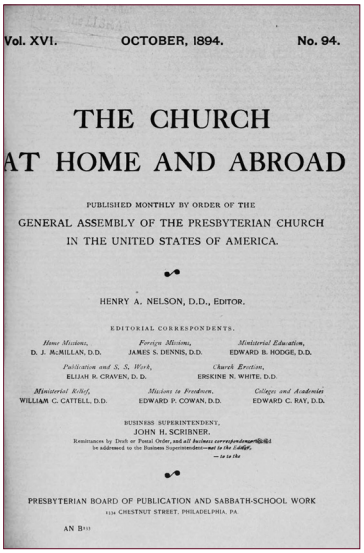
The Church at Home and Abroad（１）

おやさと研究所准教授
尾上　貴行　*Takayuki Onoue*

前回（2023年２月号）は、明治期に横浜で発行されていた３大英字新聞の１つ『Japan Weekly Mail』の1894年３月３日号に掲載された天理教に関する記事を紹介した。このころには日本で発行されていた英字新聞だけでなく、アメリカ、イギリスなどのキリスト教各派が機関誌で国外宣教の１つとして日本の状況を伝えているなかで、急速に伸展している新宗教の１つとして天理教に関する記事が散見されるようになっていた。前回紹介した記事は、その内容の大半が佛教学会発行誌『仏教』に掲載された天理教に関する記述を英語で要約したもので、いわば日本人の視点からの天理教紹介の英語版であった。一方、欧米諸国での出版物における天理教に関する記述には、欧米人独自の視点を含んでいるものもあり、外国人たち、特に執筆を担当したキリスト教宣教師たちが、どのように天理教を受け止めていたかをうかがうことができ、大変興味深い。

そのようななかから、今回と次回の２回にわたり、アメリカで General Assembly of The Presbyterian Church が発行していた月刊誌『The Church at Home and Abroad』Vol.XVI. No.94,（October 1894）に掲載された天理教に関する記述をみていきたい。この1894年10月号は全部で100頁ほどあり、プレスビテリアン派（長老派）の“Home Missions”（アメリカ国内での宣教：筆者拙訳、以下同様）と“Foreign Missions”（国外での宣教）について、さまざまな情報や報告記事が掲載されている。国外に関するニュースや報告の内容は、“Generosity of a Chinese Christian”（ある中国人キリスト教徒の寛大さ）、“Buddhist and Shinto Priests in Japan”（日本の仏教徒と神道神職）、“London Missionary Society”（ロンドン宣教師会）、“Missions in Persia”（ペルシャでの伝道）、“Difficulty of Evangelizing in Moslem”（ムスリムへの宣教の難しさ）など、多岐にわたっている。このような国外記事の１つとして、天理教は「THE TENRIKYO」という見出しで約１頁にわたり紹介されている。

執筆者は Rev. J. B. Porter という人物で、天理教について、まず“This is the name of a new religion that is becoming very popular among the peasant class of Japan. It is said to number now more than two million adherents, though it is not more than ten years since it began to attract any attention.”（天理教というのは日本の農民階級の間で非常に流布している新宗教の名前である。注目されるようになってから10年に満たないが、現在200万人ほどの信徒がいると言われている。）と書き出している。続いて、教祖と神について、“It claims, as its founder, a woman who lived about forty or fifty years ago, named O-Miki. She is supposed to have received a number of revelations, in fact, to have been a kind of incarnation of the deity. Their god, Tenrio, is a combination of ten divinities, among whom are the sun, moon, and a number of the old gods of Shinto mythology.（創始者はオミキという名前の女性で、40、50年前に多くの啓示を受け、一種の神の化身となったとされる。彼らの神、テンリオは、十の神が複合されたもので、そのなかには太陽、月、そして神道神話の古い神々が含まれている。）と説明している。


Vol. XVI.　OCTOBER, 1894.　No. 94.

THE CHURCH
AT HOME AND ABROAD

PUBLISHED MONTHLY BY ORDER OF THE
GENERAL ASSEMBLY OF THE PRESBYTERIAN CHURCH
IN THE UNITED STATES OF AMERICA.

HENRY A. NELSON, D.D., EDITOR.

EDITORIAL CORRESPONDENTS.

Home Missions, D. J. McMILLAN, D.D.
Foreign Missions, JAMES S. DENNIS, D.D.
Ministerial Education, EDWARD B. HODGE, D.D.
Publication and S. S. Work, ELIJAH R. CRAVEN, D. D.
Church Erection, ERSKINE N. WHITE, D.D.
Ministerial Relief, WILLIAM C. CATTELL, D.D.
Missions to Freedmen, EDWARD P. COWAN, D.D.
Colleges and Academies EDWARD C. RAY, D.D.

BUSINESS SUPERINTENDENT,
JOHN H. SCRIBNER.
Remittances by Draft or Postal Order, and all business correspondence should be addressed to the Business Superintendent—not to the Editor, —as to the

PRESBYTERIAN BOARD OF PUBLICATION AND SABBATH-SCHOOL WORK
1334 CHESTNUT STREET, PHILADELPHIA, PA

『The Church at Home and Abroad』Vol.XV. No.94, October 1894 の表紙

さらに、天理教では“sun and moon”（太陽と月）が“supreme creators”（最高の創造者）として崇拝されているとし、かつてはこれらの創造主は“the only beings in existence”（唯一の存在）であったが、やがて人間創造を決意し、“two beings, before unknown”（未知の２つの存在）である“a white dragon and a woman”（一匹の白い竜と一人の女性）を発見してこれらを“the model for man's body”（人間の身体モデル）とし、“troubled as to how they could give him a soul”（いかにして人間に魂を与えるか苦心しながら）、最終的に「999,999,999」（原文ママ）の“whitebait”（シラス）を使って“the manufacture of one soul”（人間の魂を創造）したと説明している。

次いで、天理教は、“Among the ignorant only”（無知な人々の間のみ）ではあるものの急速に伸展しており、その教えについて、“It teaches repentance and forgiveness of sin, and has the reputation of much more austere in its morality than either Buddhism or Shinto. Its adherents claim that the Tenrikyo is very much like Christianity in its moral requirements, while it is superior to the latter in not requiring the rejection of all other faiths.”（天理教は罪への懺悔と赦しを説き、道徳規範に関しては仏教や神道よりはるかに厳格であることで知られている。天理教は道徳的要求においてキリスト教に非常に似ているが、他の信仰を否定しない点でキリスト教より優れている、と信徒たちは主張している。）と記述している。

そして、天理教が受け入れられている要因を、“The Tenrikyo (Teaching of Heavenly Truth) wins popularity by insuring *good luck* in the shape of deliverance from sickness, earthquakes, fires and pestilence.”（病気、地震、火災や疫病からの解放というかたちでの幸運を保証することで、天理教（天の真理の教え）は評判になっている）と説明し、２人の貧しい女性の救済例を挙げて、“It teaches a kind of faith-cure.”（この教えは一種の信仰療法を説く）と述べている。しかしその一方でこれに関して、“Physicians claim that persons of this faith frequently die because they refuse to take proper remedies, relying upon the prayer of faith to save them.”（医者たちは、この信仰者たちは救済を祈りに頼り、適切な治療を拒否するため、亡くなることがしばしばある、と主張している）と、医療関係者からの危惧の声を伝えている。

次号では、天理教信者たちの信仰実践の様子や天理教の急速な進展にみる日本の宗教事情などについて記述している後半部分を紹介したうえで、この記事の特徴について考えてみたい。

出土楽器が語る音の世界―歌鐘・行鐘―

天理大学国際学部教授
中　純子　*Junko Naka*

中国古典文学における歌行

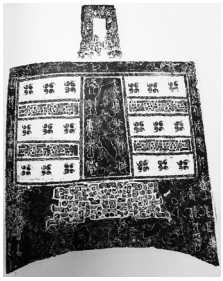
今回は、中国古代の出土楽器から文学のある核心に迫ることも可能だという事例をご紹介したい。それが「歌行」についてである。「歌行」とは何か。例えば「酒に対して当（まさ）に歌うべし、人生幾何（いくばく）ぞ」という句が人口に膾炙している曹操の「短歌行」（『文選』巻 27）や、李白の「行路難」、白居易の「長恨歌」、「琵琶行」など日本でも親しまれた有名な作品がすべて歌行であるといえば、中国古典文学において歌行がいかに重要なジャンルであるかが理解されよう。『広辞苑』には、「楽府の一体。歌と行とを兼ねた古詩の体で、おおむね長編」とある。この解説のなかの「歌と行」とは何か。大修館書店の『中国文化史大辞典』（2013 年）では、「歌行」という項目が設けられ以下のように説明されている。

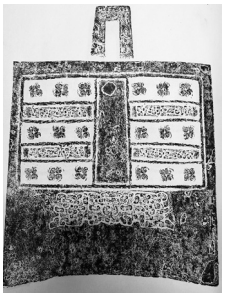
> 詩体の一つ。中国の伝統詩は唐初に成立した近体詩（今体詩）と古体詩（古詩）に大別されるが、歌行体は古体に属し、特に歌謡性の強いものをいう。もと漢の民間の歌謡である楽府に発する詩体で、「○○歌」「○○行」と題するものが多いことからこの名で呼ばれる。（136 頁）

ではなぜ同じ歌謡性の強いものが、「○○歌」「○○行」と区別されていたのであろうか。残念ながらそれについての言及は、この辞典には無い。

清水茂「『行』の本義」

これについて、一つの推論を学会に提示したのが、京都大学で長年中国語学・文学を教えていた清水茂であった。この論文は、1984 年に『日本中国学会報』第 36 集に掲載されたものである。清水氏は、「歌」については、「古代から『うた』もしくは『うたう』という意味であることがはっきりしている」として『尚書』舜典篇の「歌は言を永（なご）うす」などを引用され、経書に基づく常用語であったとする。一方で「行」について、宋以降の説明はあてにならないとし、六朝から初唐までの文献を渉猟・検討し、古辞「飲馬長城窟行」（『文選』巻 27）の李善注に「行は、曲なり」とある解釈が妥当だと判断した。そして、「行」はなぜ「曲」の意味になるのか、またどういう「曲」を「行」というのかの解答として、中国で発見された「行鐘」「歌鐘」を手がかりとした。





歌鐘と行鐘

清水氏が論文に引用したのは、1955 年の発掘に基づく安徽省博物館の報告『壽縣蔡侯墓出土遺物』（北京、科学出版社、1956 年）である。なかに「訶（歌）鐘」（上図）、「行鐘」（下図）と銘文がある楽器が出土したとある。

それは音程の違う鐘をいくつか並べてメロディを奏する「編鐘」であった。中国考古学界でも注目されたであろう。その音について詳細な研究をしたのが、李純一「関于歌鐘・行鐘及蔡侯編鐘」（『文物』1973 年、第 7 期）であり、清水氏はそれを翻訳して用いた。清水氏が示す李純一論文の結論は以下の通りである。

> 春秋戦国時期の歌鐘と行鐘の区別は、使用される場がちがうだけでなく、さらに一定の音と組み合わせのちがいにあった。つまり、歌鐘は、上層貴族の日常の饗宴の時に使用され、したがってそれは一つの完全な音階（あるいは調式）によって音を定め組合わせるものであった。行鐘は、上層貴族の巡狩征伐旅行のときに使用され、したがってその音の定めかたと組合わせは一つの音階（あるいは調式）中の骨幹音にもとづいていた。

李純一氏は、旅行用の音楽の聴覚的な効果は「sol-do-re-sol」で、簡単で剛健明快な曲調だけを演奏でき、熱烈激動の気分を造りだすのに適するばかりであるとした。清水氏は、李純一氏の論稿をひきつつ、それを「歌行」と結びつけて自論を展開する。

> その演奏には、歌鐘使用のときは、歌鐘の持つ音階による音楽が演奏され、行鐘のときは、行鐘の持つ音階による音楽が演奏されたと推測される。歌鐘の音階による音楽は、完全な音階を持つから、「歌」と題するか、あるいは特別の名が題されなかったのに対し、旅行用の音楽、つまり行鐘の持つ簡単な大音程跳躍の音階を持つ曲に対しては、旅行用の音楽という意味で「行」と名づけ、そして、それが旅行用でなくなっても、そのまま「行」の名を存したと考えられないだろうか。

もちろん、唐代以降になると「行」の本義はもはやわからなくなったと断っているが、「歌」「行」というものの謂れを説明する大胆かつ魅力的な推論である。21 世紀を四半世紀も過ぎようとしているいま、清水氏の推論はいかに受け止められているのだろうか。

清水氏の推論の行方

清水氏が根拠とした李純一氏の論稿については、発掘が進展している中国の考古学界では、管見の及ぶところ、最近では孫思雅「論両周青銅楽器之歌鐘与行鐘」（『音楽研究』2020 年、第 1 期）という論稿がある。孫氏は、歌鐘については李純一氏の結論を支持しているが、行鐘についてはなお今後の新たな考古学的発見と測音結果を待つ必要があるとして慎重な姿勢を示している。

それでは、清水氏の推論はどうであろうか。北京大学中文系教授であって歌行研究で有名な葛暁音氏に「関于“行”之釈義的補正」（『文学遺産』1999 年、第 4 期）という論稿がある。ここで葛氏は、清水氏の論稿を南山大学名誉教授の蔡毅氏の翻訳で見たうえで、「この考え方はとても啓発的である。『歌』と『行』が曲として説明され、その本義が紀元前 5 世紀の歌鐘と行鐘に遡るだろうという、この推論の信憑性はかなり高い」と紹介した。葛氏は、もともと単純な音階であった「行鐘」の歌唱法が、それゆえに何度か繰り返す形式だったはずだと推論して、ご自分の研究テーマである漢代以降の歌行の分野で、「行」が繰り返し歌われる形式であることと結び付けて論じている。葛氏の中国研究者への影響力を考えると、清水教授の説はすでに学界に受け入れられたと思われる。「歌鐘」と「行鐘」は、こうした中国と日本の研究者の研鑽によって初めて、古代の音楽のありかたを語りだしたのである。

子宮の貸与は許されるのか ― ローマ法王の最近の談話から

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

平和への道と代理母

平和への道は生命の尊重を必要とする。母の子宮に宿った時から生命は始まる。それゆえ、新しい生命は抹消されてはならないし、まして闇取引の道具になってはならない。法王フランチェスコは、1月8日、ヴァチカンにある134の国々の大使を集めて、このような話をした。子供を授けてもらうために代理母を用いることは、妊娠している女性、懐妊された子供の尊厳を踏みにじることになる。胎児は、契約して作られるものではなく、神の贈り物にほかならない。法王は、2年前にもカソリックの女性たちの集いの折に「そのような行いは非人間的な行為だ」と述べた。代理母になる女性たちはほとんどが貧しい人である。そのため、子供たちは売買される物として扱われているのだ。法王はまた、第3次世界大戦の可能性についても言及し、戦争はすでにあちこちで起きているので、それらを平和裡に収めていくべきことを強調した。

ワインを称賛

法王がワインの話をするときは、ワイン製造業者達の重労働について話すときである。今回は、特に毎年春にヴェローナで開かれるワイン祭で、その主催者ドメニコ・ポンピッリ氏とヴェローナの司教の力によって法皇の謁見の席を設けることができた。法王によれば、ワインはどんな人の心にも喜びを与えてくれるという。近年、ヨーロッパにおいて、アルコール飲料は癌の下地を作るものとして警鐘が鳴らされている。だからこそ、ぶどうの木の栽培には気を配らねばならない。法王は「ぶどう酒の製造者のことを考えてみよ。彼らは最初の雨と最後の雨を気にしている。それによって出来具合も非常に違ってくる」というヤコブの手紙を引用して、土壌や木の手入れ、アルコールの発酵状態には細心の注意と忍耐を必要とすると述べた。そして、ワインも土壌も、さらに農業技術も農家の経営努力も全ては神の贈り物だと強調した。ヴェローナワイン祭の主催者から、法王の生まれた年である1936年のバローロの本場のマルケーゼのバローロであるマルサーラ・フロリオの両ワインが、法王に贈られた。

テニスは人生に教訓を与える

法王は1月29日にスペインのバロセローナ王立スポーツクラブの代表団を招き、謁見した。このたびのオーストラリア・オープンでは、イタリア人のテニス選手ヤニック・シンナーが優勝して賜杯を手にした。今まで、テニス界を牛耳って来たのは、テニス界のベテラン3人だった。その3人が世界ランキングの上位3位を占めている。シンナーはランキングで4位である。そのベテランというのはフェデラーであり、ロージャーであり、ジョコビッチである。オーストラリア・オープンでは準決勝で、シンナーはジョコビッチにあたり、彼を凌駕した。決勝ではフェデラーにあたり、前半2セットは落としたが、3セット目から3セットを奪い優勝したのであった。イタリア中はおおいに湧いた。その時の2人の選手の年齢差は30歳に及んだという。サッカー好きで知られる法王も、テニスは人生の教訓を教えるものだと称賛した。

アルゼンチン大統領、法王を訪問

2月11日、法王はアルゼンチンで以前議論をしたことのあるミレイ大統領の謁見を受けた。大統領は真剣な面持ちでローマ法王の前に立ち、その第一声はあなたにキスをしてよろしいかというものであった。法王は快く「息子よ！　どうぞ」と言ってそれを許した。法王は一面において共産主義を認める発言をしていた。逆に、ミレイ大統領は根っからの反共産主義者であった。大統領は、世界が共産主義に染まるのを恐れていたのだ。彼は、地球が滅びるまで、共産主義が地上に残っているだろうと説いていた。法王に言わせれば、これは選挙の時のキャンペーンで、そのあとの政権では彼の主張はかなり違ってきていると言う。その後、アルゼンチンのあるシスターが初の「聖者」となり、その任命式が執り行われたが、大統領はその儀式にも参列していた。大統領は現法王がアルゼンチンをぜひ訪問するようにと述べた。以前には手紙で招待したことはあるが、今回は直接、口頭で招待を表した。法王にもいろいろな思惑があって、アルゼンチンに行くことはなかった。また日程が立てこんでいるので、今すぐとはいかないが、今年度末なら行けるかもしれないと述べた。

大統領は翌12日、イタリアのマッタレッラ大統領と面会し、同日午後にはジョルジャ・メローニ首相と会い、政治問題について意見交換を行った。

多すぎる教皇立大学

ローマにはたくさんの教皇立大学がある。それを統合整理したいというのが現法王の願いである。現在ローマには22の大学と単立大学がある。学生数は1万6千人を数えている。筆頭はグレゴリアン大学で、同大学と天理大学が2回にわたって、双方の教授による「対話」が開かれたことはよく知られている。ここには現在天理大学で教えている森下三郎教授が留学し、勉学を修めたところである。そして、聖トマス・アクィナス大学には天理教海外部に勤務する東井成則氏が通っていた。

これらの大学はもともと「聖書」を研究し、深く学ぶために創設された大学である。1万6千人の学生は、世界125カ国より勉学に来ているのである。この中で、一番古い大学がグレゴリアン大学で、1551年、イエズス会のイグナシオ・ロヨラによって開校された。一番新しいところでは1984年創立の、オプス・デイの聖十字架大学がある。

法王、ヴェネツィア映画祭へ

法王はこの4月に開かれるヴェネツィア国際映画祭、通称ビエンナーレに出席する旨、明らかにされた。これは教皇史の上では画期的なことで、法王が参加するのは史上初めてである。映画祭ではヴァチカンも展示を出すが、そのテーマは「外国人はどこにもいる」ということだそうだ。そして、そこでの展示の内容は、「人間の権利と現在のありよう」となるという話である。

図書紹介（136）

室井光広著『エセ物語』（法政大学出版局、2023 年）

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

本書は芥川賞作家・室井光広（1955 ～ 2019）が遺した壮大な未完の実験小説である。私は幸いにも室井氏と知遇を得ることができ、数多くの懇切な手紙を頂いた。室井氏は惜しくも 64 歳で急逝されたが、入院中も携帯電話（ガラケー）でメールのやり取りを行った。最後に頂いたメールに私が返信した時、室井氏はもうすでに意識はなかった。そして２日後に帰らぬ人になった。このメールのやり取りは室井氏が主宰していた文学雑誌『てんでんこ』に掲載された。(1)

室井氏の没後４年目にして、川口好美氏はじめ文学上の友人・弟子たちの尽力により刊行されたのがこの遺著『エセ物語』である。物語は、バルザックの書簡からプルーストが引用した“誤植”入りの「文章」を記したある人物の遺稿ノートを解説するところ（！）から始まる。その人物は「私」の双子の妹と結婚した外国人であるが、この「文章」もベンヤミンから取ったものだという。いきなり最初から「これは何のこっちゃ！？」となってしまうが、読者はこれで音を上げてはならない。物語はこの後、実に 750 ページも続いていくのである。しかし、これでも当初の構想の５分の３であるという。

ストーリーは有るようで無く、無いかと見えてまた現われ、物語の中には虚実取り混ぜた文献からの博引旁証がなされる。これはいったい小説なのかエッセイなのか。実はその両方なのである。これが『エセ（エッセイ）物語』のゆえんである（室井氏はモンテーニュの『エセー（試み）（随想録）』にならってそう呼んでいる）。上述のバルザックの書簡からして、19 ～ 20 世紀のフランスの文学者モンテスキューの作品からの「引用」らしい。『法の精神』を書いた哲学者モンテスキューは有名だが、文学者モンテスキューのほうはそもそも実在の人物なのか？しかもこれを書き写した人物は、「引用」の語を「陰陽」と“間違って”書いている。そもそも物語それ自体が、とてつもない『エセ（似非）物語』なのである。

ここまで書いた部分でも、まだ本書の最初の３ページほどを説明したに過ぎない。いや、これで説明になっているだろうか。しかし、ここまでのところで気が付く人は気が付くであろう。この物語の背後に、ジョイスやボルヘス、プルーストやキルケゴールが存在していることを。読者はこの迷宮のような作品の中を手探りで進んで行かなければならない。この手法は、室井氏の芥川賞受賞作の小説「おどるでく」（1994 年）でも取られたものでもあった。『エセ物語』は「おどるでく」の続編としても読むことができる。

この実験小説の見取り図は次の通りである。物語は三巻構成になっている（本来は五巻構成の計画で、各章が十干十二支で銘打たれ、全 60 章で完結する予定であった）。

「第一の巻」は、「室井光広」なる「私」が双子の妹の元夫だったユダヤ系の「重（ジュウ）さん」による遺稿ノートを紐解きながら、自らの記憶を往来する話である。その記憶の「頭陀袋」がいつしか破れて記憶の「ずたずた袋」となり、どこまでが「重さん」でどこまでが「私」なのか、言葉のカオスの中へと読者は誘われていく。

「第二の巻」はエセ物語編纂人の三井幸という女性が「私」として登場する。彼女はかつて小説家志望の松井光晴（通称マッツィ）と私塾を共同経営し、一時期同棲していたことがあるが、今は鍼灸師の男性と神奈川県の某所で暮らしている。松井光晴なる人物は少し発音をずらせば室井光広である。三井幸は東北オクライリ村のマッツィ氏から届いた段ボール箱の中のノート類から、新たな「エセ物語」を紡ぎ始める。

そして「第三の巻」では、やはりエセ物語編纂人の一人である八木（ヤキ）タキが「私」として登場する。女性名だが終始「僕」とか「俺」という男性言葉で物語る（「私」で語ることもある）。彼女は大学の獣医学部を卒業して松井ミーハー（光晴）先生の私塾に入門し、O・モロイ（おもろい！）氏なる諸井治という人物との交流を交えながら、やはり独自の「エセ物語」を語っていく・・・。

主人公が次々と入れ替わって自らの物語を語っていく書き方は、キルケゴールの『人生行路の諸段階』を連想させる。しかもこの物語の中にさらに小さな謎めいた物語（『エセ物語』の場合は和歌もどきの一覧表や歌舞伎めいたものまである）も含まれているところまでよく似ている。そして、これら三巻全体は決して話はバラバラになってはいない。「第一の巻」で登場した重（ジュウ）さんの遺稿らしき『東亜共通常用語三〇〇〇語』が度々引用され、東亜（日本、中国、韓国）の３言語の統一した話し言葉の創成が目指されているようなのだ。

作者・室井光広の言語に対する愛好は相当なもので、東アジアの言語だけでなく様々な欧米語がこの物語の中で日本語と交差しあう。しかも、日本語の中で室井氏が軸足を置くのは、自らの出身である福島の会津方言である（登場する重要な地名の多くが東北地方のもの、ただし架空の地名であるが）。室井氏はヨーロッパの東北弁たるデンマーク語や、またデンマーク文学に親近感を抱いており、『キルケゴールとアンデルセン』（講談社、2000 年）という大部の評論をも書いている。

本書を通読して思うのは、文学というものがいかに無償の営みであるかということだ。『エセ物語』は東日本大震災を跨いで書き続けられた。室井氏は震災以降、商業誌からきっぱりと袂を分かち、自ら「単独者の組合」たる「てんでんこ」なるグループを作り、そこを舞台に創作活動を行った。そして、壮大な実験小説である『エセ物語』もまた、クラウドファンディングによる心ある多くの人たちの支援があって、作者没後４年目にして刊行に至ったものなのである。

［註］

(1)「ゲンテルセン通信スムーレ篇」（室井光広・金子昭）、『てんでんこ』（室井光広追悼号）、2020 年、２～ 62 頁。

2023年度

天理大学おやさと研究所特別講座

「教学と現代」

社会の中で問われる宗教の役割と使命

ー格差・ジェンダー、そして宗教の公共性ー

【演題】現代日本社会と宗教の役割

【講師】熊田 一雄 氏（愛知学院大学准教授）

2024年3月25日（月）14:00～16:20

天理大学研究棟３階 第一会議室

研究棟正面西側の自動ドアから入り、エレベーターで３階に上がり、右側へお進みください

プログラム

14：00 ～ 14：10	開会挨拶　井上 昭洋 所長 趣旨説明　金子 昭 研究員
14：10 ～ 15：00	講演　熊田 一雄 氏 「現代日本社会と宗教の役割」
15：00 ～ 15：10	休 憩
15：10 ～ 15：30	コメント①　堀内 みどり 主任 「ジェンダー論の視点から」
15：30 ～ 15：50	コメント②　澤井 真 研究員 「宗教の公共性の視点から」
15：50 ～ 16：20	質疑応答
16：20	閉会挨拶　井上 昭洋 所長

グローカル天理
第 25 巻　第 4 号　（通巻 292 号）
2024 年（令和 6 年）4 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　井上昭洋
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan